
会 長 就 任 に 当 っ て

(財)日本植物調節剤研究協会 会長 榑渕欽也

昨年12月26日の役員会において、会長に選出され、吉澤前会長の後をお引き受けすることになりました。御承知の通り前会長は、当協会創立以来26年の長きに亘り、協会の発展はもとより、植物調節剤の開発・普及に貢献してこられた功労者であり、第一人者であります。このような大物の後を引き継ぐことは、大変に荷の重いことではありますが、関係各位の御理解と御支援をたよりに、微力ではありますが精一杯の努力を致す所存です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

ところで、私は農薬分野につきましてはこれまであまり縁がなかった関係から、初めに、少し自己紹介をさせていただきます。

まず、私のふるさととは群馬県月夜野町です。利根川の上流にあって、霊峰谷川岳を指呼の間に仰ぐ、山紫水明の郷です。

「文珠の水の滴りは、暫し木の葉の下ぐり、清濁併せやがてまた、阪東の野を潤さん」これは私の母校旧制沼田中学校の校歌の一節ですが、子供心に郷里の美しい自然を誇らしく歌いまくったものです。

谷川岳や尾瀬などをホームグラウンドとして育った根っからの山男ですが、それだけに、山への愛着と郷愁を人一倍強く持ち合わせております。

次に、私の専門である水稻育種にひと言ふれさ

させていただきます。現役時代、20年以上に亘って水稻育種の道一筋に打ち込んでまいりました。

このように、我が国農業の基幹作物である稲と取り組んで、長年育種研究を続けて来れたことを何より幸運だったと思っています。育種という仕事は無限の可能性を秘めた世界であるだけに、まことに魅力的です。育種家冥利につきる思いの22年間でした。

最近、メーカーの方々から除草剤開発の話を拝聴する機会が多々ありますが、その度に品種開発の仕事と相通ずるところが多いように思い、大変興味深く感じています。例えば、莫大な数にのぼる新規化合物の合成や、その目的別スクリーニングなどは育種における変異系統の作出や選抜の場面とそっくりです。また、数万分の1の率でスクリーニングされてきた有望な各社の剤が、当協会のコーディネイトのもとに、当協会や国公立の研究所の効果、薬害等のテストを受け、一定の基準にもとづいて「実継」の判定が下される仕組みも、育成系統が、ある段階から県農試等による適応性検定や、奨励品種決定試験というテストを受け、最終関門として、普及展示圃など現地試験を通して、各県での普及への可否が決められる手順と大変共通したシステムのように感じられます。そんなことから、当協会の仕事内容は、専門性の違いを超えて、

なじみ易く感じている次第です。また、最終産物の市場競争の激しい中で、より優れる新規化合物の合成に尽力されている企業の研究者諸氏の苦勞がよく解るような気がして、心から御健斗を祈らずにはおれません。

次に、私の趣味の囲碁についてひと言云わせていただきます。子供の頃、碁キチの父に教えられ、高校時代にその面白さに魅せられ、語学ならぬ碁学に傾倒してしまいました。その甲斐あってか、卒業の頃は肝心の学問の方はさっぱりでしたが、碁の方はかなりの実力を身につけることが出来ました。こうして、幸か不幸か囲碁はその後の私の人生の伴侶として、私の生活に付きまとうようになってしまいました。

美しい櫃の五寸盤に向って、正座し、分厚い蛤の白石をパチリと打ち下ろす快感は何とも云えません。こうして、暇さえあれば、石を並べ、女房を呆れさせております。囲碁上達の要諦は 1) 大局観、2) 定石に拘わらない柔軟な発想、3) 次の手を読む力、4) 勝負所における形勢判断能力 の 4 点にあると私は信じておりますが、同時にこれらは、私の人生を生きる上での座右の銘でもあります。

自己紹介が少々長くなりすぎて失礼しましたが、ここで、植物調節剤の開発・利用の方向等について、少しく私見をのべてみたいと思います。

今、世界の眼は中東の湾岸戦争に注がれています。戦争は人々の期待に反して長期化の様相

をみせています。この先、石油はどうなるのか、日本の経済にどう響くのか、地球環境は大丈夫か、等々不安は募るばかりで、まことに先行き暗く不透明な情勢にあります。

一方、国際化の進展の中で、我が国農業はかつてない厳しい局面を迎えております。ウルグァイラウンドでのコメの自由化問題はどうか、コメは国内で自給する方針を貫く」とする政府にどれだけ勝算があるのか、国民の多くはここに大きな関心をよせています。コメの自由化をめぐる攻防こそ、日本農業の勝負どころと見ているからではないでしょうか。

いずれにしても、国際化の進展する中で、世界に互して、我が国の農業をより健全に維持・発展させることは喫緊の国家的命題といつてよいでしょう。しかし、そのためには、農産物の抜本的なコストダウンと、消費ニーズをふまえた高品質・高付加価値化の実現が必須の課題と思われます。加えて、環境保全や安全性などへの社会的ニーズにも応えていかねばなりません。

これからの農業資材やその利用技術の開発の方向も、こうした視点を重視して、構築さるべきと思います。植物調節剤の開発・利用の方向に即して云うならば、1) 生産性向上に安定した効果があること、2) できるだけ安価なものであること、3) 環境にやさしい(安全な)ものであること、つまり、安定、安価、安全の三・安のすべてを克服し、レベルアップすることが大変に厳しいけれども不可欠の課題ではないで

しょうか。

ちなみに、戦後の稲作技術の発展を省力化の視点からとらえるとき、その中心をなしたものは田植機や収穫機に代表される機械化の進展と除草剤の開発・利用による除草労力の軽減にあったことは周知の事実です。しかし、低コスト化の視点から見ると、除草剤の利用は省力化が即、低コスト化に寄与してきましたが、機械化はそうはいかず、いわゆる‘機械化貧乏’によって経営を苦しめています。つまり、機械化は、装備に見合った規模拡大が伴わなければ、低コスト化に結びつかない宿命を持っているからです。その点除草剤の場合は規模の影響を受けることが少いため、省力化即低コスト化となり易い利点に恵まれているといつてよいでしょう。

今日、水田除草は僅か10 a 当り3時間前後で片付けられるようになっていますが、かつて、手取り除草時代には50時間を超す重労働（現在の稲作全労働時間に匹敵）を強いられていたことを考えると、除草剤開発の功德は計り知れな

いものがあり、農民にとってはまさに救世主を得た思いでありましょう。このように、除草剤は今や、食料生産上不可欠の存在になっておりますが、一方、近年、環境保全や安全性への関心が異常なほど高まっている中で、農薬に対する不信感を煽る動きのあることも無視するわけにはいきません。そこで、我々としては、農薬全般に対する謂れなき不信感を除くためにも、自からの姿勢を正すべきことは勿論であります。適正使用下における農薬の必要性和安全性について、広く一般市民の理解を得る努力が何よりも必要だと思います。

農業をめぐる情勢は大変に厳しいものがありますが、関係業界をはじめ、公的機関や大学関係者等の一層の連繫強化を図りつつ、植物調節剤の開発・利用の面から、低コスト、高付加価値化農業の発展に寄与すべく、当協会の役割りを積極的に果してまいりたいと考えております。重ねて、関係者各位の御支援をお願いして、就任の挨拶とさせていただきます。